

防除第17号  
令和3年6月24日

目次

各位

三重県病害虫防除所長

**令和3年度病害虫発生予報第3号**

	ページ
1. 向こう1か月の予報と対策	1
2. 作物別の状況	2
3. 発生時期・発生量(平年比)の予察根拠	8
4. 予察項目の見方	15
5. 気象のデータ	16
6. おしらせ	18

このことについて、下記のとおり発表します。

1. 向こう1か月の予報と対策

1) 作物

イネでは、葉いちはやや多、穂いもちの発生時期は平年並、発生量はやや多と予想されます。圃場を見回り、早期発見、早期防除に努めてください。紋枯病の発生時期および発生量は平年並、白葉枯病の発生量は平年並と予想されます。セジロウンカの発生時期は早、発生量はやや多と予想されます。トビイロウンカの発生時期は早、発生量はやや多と予想されます。今後の発生状況に注意し適期防除に努めてください。斑点米カメムシ類は平年並、イネクロカメムシは平年並、ツマグロヨコバイは少と予想されます。

2) 果樹

カンキツでは、そうか病、黒点病の発生量は平年並と予想されます。かいよう病(温州みかん・中晩柑)、ミカンハダニ、チャノキイロアザミウマの発生量はやや少と予想されます。

ナシでは、黒星病の発生量はやや多と予想されます。降雨が続く場合は予防的に防除を実施してください。ハダニ類の発生量はやや少と予想されます。

ブドウでは、べと病の発生量は平年並と予想されます。

果樹共通では、果樹カメムシ類の発生量はやや少と予想されます。

3) 茶

チャでは、クワシロカイガラムシ、チャノコカクモンハマキの発生量はやや多と予想されます。今後の発生状況に注意し適期防除に努めてください。クワシロカイガラムシの発生時期は平年並と予想されます。チャノホソガ、チャノミドリヒメヨコバイ、チャノキイロアザミウマの発生量は平年並と予想されます。炭疽病、カンザワハダニの発生量はやや少と予想されます。

4) 野菜

イチゴでは、炭疽病の発生量は平年並と予想されます。ハダニ類の発生量はやや少と予想されます。うどんこ病の発生量は少と予想されます。ネギ共通では、ネギコガの発生量は、やや少と予想されます。

515-2316 三重県松阪市嬉野川北町 530

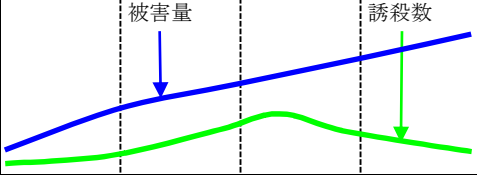
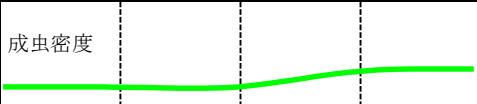
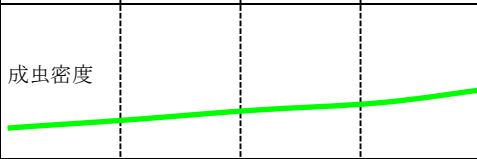
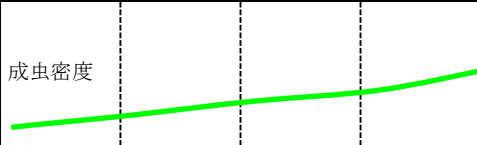
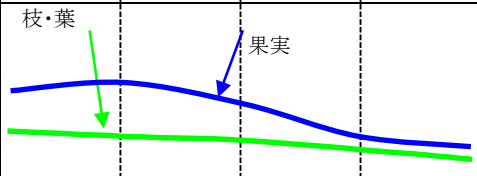
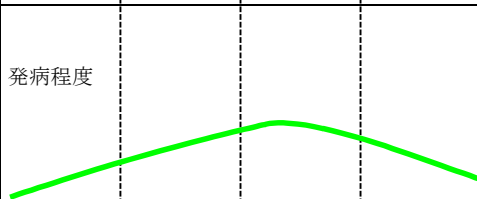
TEL 0598-42-6365 Fax 0598-42-7568

ホームページ<http://www.pref.mie.lg.jp/byogai/hp/index.htm>

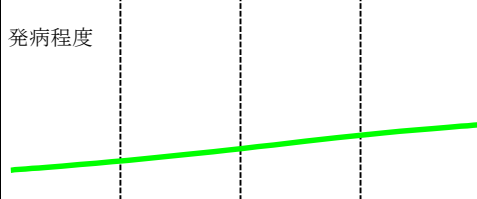
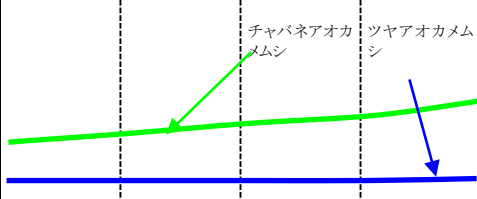
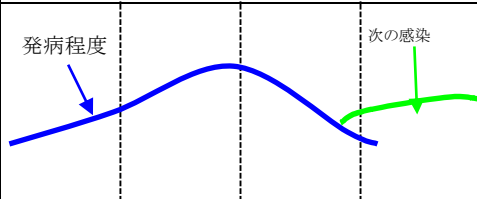
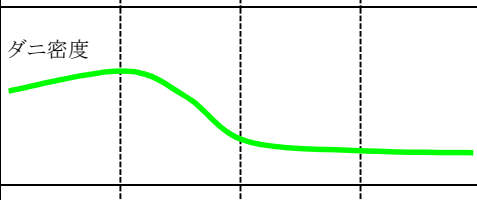
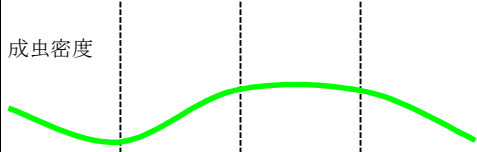
農薬はラベルの表示を確認して、正しく使用してください。

## 2. 作物別の状況

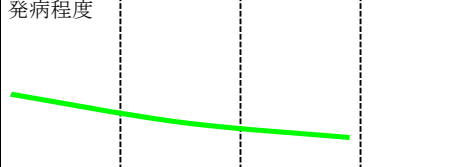
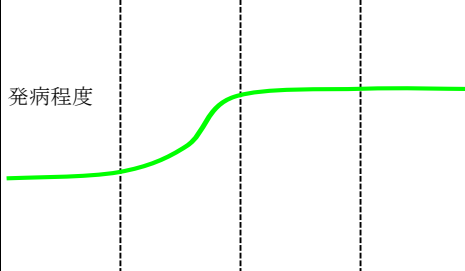
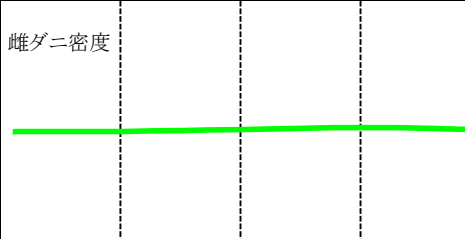
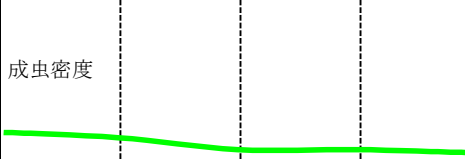
作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生消長の一例				防除の注意事項
						6月	7月			
		平年比	平年比	程度	平年比	下旬	上旬	中旬	下旬	
イネ	葉いもち	平年並	やや多	中	普通					<ol style="list-style-type: none"> <li>圃場を見回り、早期発見、早期防除に努めてください。</li> <li>補植用置き苗は発生源となるので、速やかに取り除いてください。</li> <li>感染適温は 24℃で、葉身の「ぬれ」時間が長いほど感染量が多くなります。</li> <li>雨天が続いた場合、天気予報を参考にしながら、雨の合間を見計らって防除をしてください。</li> </ol>
	穂いもち	平年並	やや多	中	普通					<ol style="list-style-type: none"> <li>上位葉の葉いもち病斑が伝染源となります。</li> <li>圃場および周辺圃場での葉いもちの発生状況に注意してください。</li> <li>薬剤散布は出穂始めから穂揃い期に予防的に行ってください。</li> </ol>
	紋枯病	平年並	平年並	小	普通					<ol style="list-style-type: none"> <li>幼穂形成期頃(穂肥時期)から発生が目立つようになります。</li> <li>水面に近い茎から茎へ感染します。薬剤散布によって病斑の上位葉への進展を阻止してください。</li> </ol>
	白葉枯病	—	平年並	小	低					<ol style="list-style-type: none"> <li>深水、冠水、台風によって感染や発病が助長されます。</li> <li>常発地では台風直後に薬剤散布をしましょう。予防的な薬剤散布が効果的です。</li> <li>「みえのゆめ」は耐病性の弱い品種なので注意してください。</li> </ol>
	斑点米カメムシ類	—	平年並	小	普通					<ol style="list-style-type: none"> <li>畦畔などのイネ科雑草で増殖します。草刈りをこまめに行い、イネ科雑草の穂がつかないように管理してください。</li> <li>水田内で雑草が多発すると、水田への侵入を助長するため、早めに除去しましょう。</li> <li>出穂2～3週間前と出穂期の2回除草が効果的です。出穂2～3週間前の1回除草だけでは、水稻の出穂期に、再び畦畔のイネ科雑草の穂がでてカメムシが本田に飛来します。</li> </ol>

作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生消長の一例				防除の注意事項
						6月	7月			
						下旬	上旬	中旬	下旬	
イネ	イネクロカメムシ	—	平年並	小	普通		1) 常発地で薬剤散布する場合は、越冬成虫の発生量がピークとなる6月下旬に実施してください。 2) 日中は株元に潜んでいるので、夕方や曇天の日に薬剤散布を行うと効果的です。			
	ツマグロヨコバイ	—	少	小	低		1) 萎縮病を媒介しますが、本県での発生は少ないとされています。 2) 当面、防除が必要な密度には達しないと思われます。			
	セジロウンカ	早	やや多	小	低		1) 例年、6月末から7月にかけて海外から飛来します。九州以北では越冬できないとされています。 2) 被害の発生は局所的であることが多いです。 3) 多発時は発生予察情報に従い防除してください。			
	トビイロウンカ	早	やや多	—	—		1) 例年、6月末から7月にかけて海外から飛来します。九州以北では越冬できないとされています。 2) 被害の発生は局所的であることが多いです。 3) 多発時は発生予察情報に従い防除してください。			
カンキツ	そうか病	—	平年並	小	普通		1) 常発圃場や昨年多発した圃場、幼木園、高接ぎ更新園の温州みかんでは、発生に注意してください。 2) 果実への感染は梅雨末期頃までと言われています。			
	黒点病	—	平年並	小	普通		1) 枯枝が伝染源です。梅雨時期の枯枝発生に注意し、樹冠内や圃場内の枯枝を除去してください。 2) 薬剤散布は前回の散布後に積算降水量が200～300mmに達した時を目安に実施してください。			

作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生消長の一例				防除の注意事項	
						6月		7月			
						下旬	上旬	中旬	下旬		
カンキツ	かいよう病	—	温州 やや少	温州 小	温州 低	発病程度					<ul style="list-style-type: none"> <li>1) 降雨があると急速に感染が広がるので、発生圃場では雨の合間に防除してください。</li> <li>2) 発病枝葉、果実は、見つけ次第剪除し処分してください。</li> <li>3) 幼木や高接樹ではミカンハモグリガの被害部に発病しやすいので、ミカンハモグリガの防除を実施してください。</li> <li>4) 中晩柑類では、梅雨期頃から10月中下旬頃まで果実への感染が起こります。</li> </ul>
	ミカンハダニ	—	やや少	中	普通	ダニ密度					<ul style="list-style-type: none"> <li>1) 発生密度が高くなると防除が困難になります。1葉当りの雌成虫発生数が0.5～1.0頭程度を目安に防除してください。</li> <li>2) 薬剤は葉裏にもかかるように散布してください。</li> <li>3) 同一系統薬剤の連用は避けてください。</li> </ul>
	チャノキイロアザミウマ	—	やや少	小	普通	成虫密度					<ul style="list-style-type: none"> <li>1) 寄生果率10%を目安に防除してください。</li> <li>2) 7月になり果実肥大が進むと果頂部で加害します。</li> <li>3) 圃場周辺のイヌマキ・サンゴジュ等が発生源となります。</li> </ul>
ナシ	黒星病	—	やや多	中	普通	発病程度					<ul style="list-style-type: none"> <li>1) 発病果及び発病葉は除去して、圃場外に持ち出し処分してください。</li> <li>2) 発病が確認される圃場では、すみやかに防除を計画してください。</li> <li>3) 薬剤散布を実施するときは薬剤をていねいに散布し、同一系統薬剤の連用を避けてください。</li> </ul>
	ハダニ類	—	やや少	中	普通	ダニ密度					<ul style="list-style-type: none"> <li>1) 1葉当り寄生数が1～2頭で防除を実施してください。</li> <li>2) 7～8月に密度が高くなります。徒長枝での発生にも注意してください。</li> <li>3) 同一系統薬剤の連用は避けてください。</li> </ul>

作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生消長の一例				防除の注意事項
						6月		7月		
						下旬	下旬	中旬	下旬	
ブドウ	べと病	—	平年並	小	普通	発病程度				<ol style="list-style-type: none"> <li>1) 降雨が連続すると病徴が急速に進展するので、葉裏に病斑を認めたら直ちに薬剤を散布してください。</li> <li>2) 降雨の合間に防除を計画してください。</li> <li>3) 被害葉及び被害落葉は感染源となるので圃場外に持ち出して処分してください。</li> <li>4) 同一系統薬剤の連用を避けてください。</li> </ol>
果樹共通	カメムシ類	—	やや少	少	低				<ol style="list-style-type: none"> <li>1) 7月後半以降で飛来数が増加する可能性がありますので注意が必要です。</li> <li>2) ナシ(無袋栽培)、カキでまとまった飛来を確認したら、防除を実施してください。</li> <li>3) 中山間地や以前多発したことがある地域では、圃場への飛来に注意してください。</li> </ol>	
チャ	炭疽病	—	やや少	小	普通	発病程度			<ol style="list-style-type: none"> <li>1) 旧葉の病斑が感染源です。新葉の展葉までに毛茸の脱落部分から感染します。</li> <li>2) 新芽の1葉期前後に感染し易く、潜伏期間の15~20日を経て発病します。</li> <li>3) 二番茶摘採後に整剪枝を行うことによって、発生が抑制できます。</li> </ol>	
	カンザワハダニ	—	やや少	小	低	ダニ密度			<ol style="list-style-type: none"> <li>1) 葉裏に産卵するので、丁寧に散布してください。</li> <li>2) 天敵が増加する時期なので、天敵に影響が少ない薬剤を選択してください。</li> <li>3) 薬剤抵抗性が発達しやすいので同一系統の薬剤の連用は避けてください。</li> </ol>	
	チャノホソガ	—	平年並	中	普通	成虫密度			<ol style="list-style-type: none"> <li>1) 年間6~7世代発生します。</li> <li>2) 防除適期は孵化直後の潜葉期(絵描き状態)です。</li> <li>3) ハマキムシ類の間接暴露による薬剤抵抗性の発達を避けるため、ジアシルヒドラジン系 IGR 剤(虫18)、ジアミド剤(虫28)の使用回数は最大年1回までとしてください。</li> </ol>	

作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生消長の一例				防除の注意事項
						6月	7月			
		平年比	平年比	程度	平年比	下旬	上旬	中旬	下旬	
チャ	チャノミドリヒメヨコバイ	—	平年並	中	普通					1) 年間 5～8 回発生し、新芽を加害します。葉先が褐変し、ひどくなると落葉します。 2) 萌芽期～開葉初期に防除してください。
	チャノキイロアザミウマ	—	平年並	中	普通					1) 年間 7～8 回発生し、新芽を加害します。萌芽初期に芽の芯から加害し、条痕となります。 2) 萌芽期～開葉初期に防除してください。
	クワシロカイガラムシ	平年並	やや多	中	普通					1) 病害虫防除技術情報第 4 号(5 月 13 日発表) 2) 年 3 回発生します。孵化最盛期の 2～5 日後が防除適期です。 3) 有効積算温度による発生消長予測式では、第 2 世代幼虫の孵化最盛期は平年より早いと予測されます。 4) 歩行型幼虫の発生状況をルーペ等で実際に確認して防除してください。 5) 孵化開始から 2 週間程度の断続的な散水により孵化抑制及び孵化幼虫の生存率を低下できます。 6) 天敵に影響の少ない薬剤を選択してください。
	チャノコカクモンハマキ	—	やや多	小	普通					1) 年間 4 世代発生します。防除適期は誘殺ピークの 7～10 日後です。 2) 病害虫防除所ホームページにフェロモントラップの誘殺状況を掲載していますので参考にしてください。 3) 交信かく乱剤をまとまった面積に実施することにより、次世代以降の密度を下げるすることができます。 4) 薬剤抵抗性の発達を防ぐためジアシルヒドラジン系 IGR 剤(虫 18)、ジアミド剤(虫 28)の使用回数は最大年 1 回までとしてください。

作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生消長の一例				防除の注意事項
						6月	7月			
		平年比	平年比	程度	平年比	下旬	上旬	中旬	下旬	
イチゴ	うどんこ病	-	少	小	低	発病程度 				<ol style="list-style-type: none"> <li>1) 育苗期の防除を徹底してください。</li> <li>2) 薬剤防除は予防散布に努めます。葉裏から発生しやすいので、薬液が葉裏に十分かかるよう丁寧に散布してください。</li> <li>3) 発病を認めたときは、集中的に散布して感染拡大を防いでください。</li> </ol>
	炭疽病	-	平年並	中	普通	発病程度 				<ol style="list-style-type: none"> <li>1) 病原菌は高温多湿条件を好み、梅雨時期以降に発生が多くなるため、十分な注意が必要です。</li> <li>2) 病原菌(孢子)を含む水の跳ね返りで感染が拡大します。頭上灌水は避け、株を濡らさないようにしてください。</li> <li>3) 発病株は感染源となるため、周辺株を含めて直ちに除去し、処分してください。</li> <li>4) 薬剤防除は、薬液が株元まで十分かかるよう丁寧に散布してください。</li> </ol>
	ハダニ類	-	やや少	小	普通	雌ダニ密度 				<ol style="list-style-type: none"> <li>1) 作物残渣から歩行によって移動します。葉かき後の残渣は圃場外に持ち出し、速やかに処分してください。</li> <li>2) 多発すると防除が困難になります。早期発見に努め、発生初期に防除を行ってください。</li> <li>3) 散布は葉裏を中心に丁寧に行ってください。</li> <li>4) 薬剤抵抗性が発達しやすいので、同一系統薬剤の連用は避けてください。</li> </ol>
ネギ共通	ネギコガ	-	やや少	小	普通	成虫密度 				<ol style="list-style-type: none"> <li>1) 春から秋にかけて4~5回発生します。</li> <li>2) 幼虫は葉の内部に潜り、表皮を残して食害します。潜入防止のため、発生初期から防除を行うことが重要です。</li> </ol>

### 3. 発生時期・発生量(平年比)の予察根拠

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
イネ	葉いもち	平年並	やや多	<p>要因</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 1か月予報(6月17日発表)によると、気温はほぼ平年並、平年に比べ曇りや雨の日が多い予想 (+)</li> <li>2) プラストム(6月20日現在)によると、感染好適条件は、6月16日～18日にかけて広範囲で出現 (+)</li> <li>3) 巡回調査圃場(6月第1～2週)では、本田における発生圃場率0%(平年0%)と平年並に少 (±)</li> <li>4) 置き苗での発生は、巡回調査圃場(6月第1～2週)では1地点で発生を確認。広域病害虫防除員調査圃場(6月上旬)では1地点で発生を確認 (±)</li> <li>5) 一般圃場では、発生量は無で、平年並に少 (±)</li> </ol> <p>考察:巡回調査結果および一般圃場の発生状況から現状の発生量は平年並と考えられ、気象を考慮して予想発生量はやや多と考えます。</p>
	穂いもち	平年並	やや多	<p>要因</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 1か月予報(6月17日発表)によると、気温はほぼ平年並、平年に比べ曇りや雨の日が多い予想 (+)</li> <li>2) 農業研究所作況試験田(4月26日移植コシヒカリ、移植50日目)によると、葉齢の進展は平年並 (発生時期±)</li> <li>3) 一般圃場では、生育は概ね平年並 (発生時期±)</li> <li>4) 葉いもち発生量はやや多の予想 (+)</li> </ol> <p>考察:水稻の生育状況を考慮して予想発生時期は平年並、葉いもちの予想発生量を重視して、予想発生量はやや多と考えます。</p>
	紋枯病	平年並	平年並	<p>要因</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 農業研究所作況試験田(4月26日移植コシヒカリ、移植50日目)によると、葉齢の進展は平年並、茎数はやや少ない (発生時期±、発生量-)</li> <li>2) 昨年8月の巡回調査圃場では、発生圃場率35.2%(平年27.8%)と多い傾向、発病度は1.3(平年1.5)とやや少の傾向 (±)</li> <li>3) 一般圃場では、生育は平年並、茎数はやや少ない (発生時期±、発生量-)</li> </ol> <p>考察:水稻の生育状況を考慮して予想発生時期は平年並、同様に水稻の生育状況と感染源となる越冬菌核量を考慮して、予想発生量は平年並と考えます。</p>
	白葉枯病	—	平年並	<p>要因</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 1か月予報(6月17日発表)によると、気温はほぼ平年並、平年に比べ曇りや雨の日が多い予想 (+)</li> <li>2) 県内では4月以降、激しい風を伴う大雨はなし (-)</li> </ol> <p>考察:これまでのところ、激しい風雨による冠水の機会は少ないため、予想発生量は平年並に少と考えます。</p>



作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
イネ	斑点米カメムシ類	—	平年並	<p>要因</p> <p>1)1 か月予報(6月17日発表)によると、気温はほぼ平年並、平年に比べ曇りや雨の日が多い予想(±)</p> <p>2)水田位置予察灯(4月第1半旬～6月第2半旬)では、誘殺数はアカスジカスミカメ7頭(平年12.7頭)と少、アカヒゲホソミドリカスミカメ0頭(平年18.5頭)と少(—)</p> <p>3)巡回調査圃場(6月第1～2週)では、畦畔イネ科雑草すくい取りによる発生地点率は、ホソハリカメムシで6.5%(平年7.7%)とやや少、クモヘリカメムシで3.2%(平年0%)と多の傾向、シラホシカメムシ類で4.8%(平年4.2%)とやや多、アカスジカスミカメで14.5%(平年41.4%)と少、アカヒゲホソミドリカスミカメで1.6%(平年11.1%)と少、概して平年並(±)</p> <p>考察:巡回調査結果から、現状の発生量は平年並と考えられ、予想発生量は平年並と考えます。</p>
	イネクロカメムシ	—	平年並	<p>要因</p> <p>1)予察灯(4月第1半旬～6月第2半旬)では、誘殺数は水田位置10頭(平年5.6頭)と多、畑位置21頭(平年98.3頭)と少(±)</p> <p>2)巡回調査圃場(6月第1～2週)では、発生圃場率1.4%(平年1.5%)と平年並、25株当たり成虫数0.009頭(平年0.004頭)と多(+)</p> <p>3)一般圃場では、発生量は少(—)</p> <p>考察:一般圃場を重視して、現状の発生量は平年並に少と考えられ、予想発生量は平年並と考えます。</p>
	ツマグロヨコバイ	—	少	<p>要因</p> <p>1)予察灯(4月第1半旬～6月第2半旬)では、誘殺数は松阪市・水田位置0頭(平年0.4頭)と少、紀北町0頭(平年0頭)平年並に少、御浜町0頭(平年0.3頭)でやや少、松阪市・畑位置4頭(平年34.2頭)と少、伊賀市(5月第1半旬～6月第2半旬)0頭(平年0.2頭)は平年並に少(—)</p> <p>2)巡回調査圃場(6月第1～2週)では、払い落とし成幼虫数0.07頭(平年0.16頭)と少(—)</p> <p>3)一般圃場では、発生量は少(—)</p> <p>考察:予察灯、巡回調査結果、一般圃場の発生状況から、現状の発生量は少と考えられ、予想発生量は少と考えます。</p>
	セジロウンカ	早	やや多	<p>要因</p> <p>1)予察灯・松阪市水田位置では6月13日初誘殺(平年初誘殺7月20日)(発生時期—)</p> <p>2)巡回調査圃場(6月第1～2週)では、払い落とし成幼虫数は0頭(平年0.002頭)と平年並に少(±)</p> <p>3)一般圃場では、発生量は平年並に少(±)</p> <p>考察:これまでの誘殺状況から発生時期は早く、初誘殺から水稻収穫までの期間が長くなることから発生密度が上昇すると予想されるため、予想発生量はやや多と考えます。</p>

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
イネ	トビイロウンカ (例年より発生が早い ため特別に記載 しています)	早	やや多	<p>要因</p> <p>1) 予察灯・松阪市畑位置では6月11日初誘殺、6月13日4頭誘殺。本予察灯では過去10年で3度誘殺があり、最も早い2019年の7月15日より1か月以上早い(発生時期-)</p> <p>2) 巡回調査圃場(6月第1~2週)では、払い落とし成虫数は0頭(平年0頭)と平年並(±)</p> <p>考察: これまでの誘殺状況から発生時期は早く、初誘殺から水稻収穫までの期間が長くなることから発生密度が上昇すると予想されるため、予想発生量はやや多と考えます。</p>
カンキツ	そうか病	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(6月17日発表)によると、気温はほぼ平年並、平年に比べ曇りや雨の日が多い予想(+)</p> <p>2) 県予察圃(6月上旬、無防除)では、春葉発病率70.8%(平年79.8%)と少、発病果率92.5%(平年70.5%)と多(±)</p> <p>3) 巡回調査圃場(6月第1~2週)では、春葉発病度0.03(平年0.02)と平年並(±)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は少(-)</p> <p>考察: 巡回調査結果の発生状況を考慮して、現状の発生量は平年並と考えられ、引き続き予想発生量は平年並と考えます。</p>
	黒点病	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(6月17日発表)によると、気温はほぼ平年並、平年に比べ曇りや雨の日が多い予想(+)</p> <p>2) 県予察圃(6月上旬、無防除)では、果実発病率45.8%(平年24.7%)と多(+)</p> <p>3) 巡回調査圃場(6月第1~2週)では、春葉発病度0.06(平年1.2)と少(-)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は少(-)</p> <p>5) 感染源となる枯枝量は平年並(±)</p> <p>考察: 現状の発生量はやや少と考えられますが、今後の気象条件を考慮して予想発生量は平年並と考えます。</p>
	かいよう病	-	温州 やや少  中晩柑 やや少	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(6月17日発表)によると、気温はほぼ平年並、平年に比べ曇りや雨の日が多い予想(+)</p> <p>2) 県予察圃(6月上旬、新甘夏、無防除)では、春葉発病率1.2%(平年1.3%)と平年並、発病果率0%(平年0.2%)とやや少(-)</p> <p>3) 巡回調査圃場(6月第1~2週)では、春葉発病率は温州みかんでは0%(平年0.1%)とやや少、中晩柑では2.0%(平年3.2%)と少(-)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は少(-)</p> <p>考察: 温州みかんでは、現状の発生量はやや少と考えられ、引き続き予想発生量はやや少と考えます。中晩柑類では、現状の発生量は少と考えられますが、今後の気象条件を考慮して予想発生量はやや少と考えます。</p>

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
カンキツ	ミカンハダニ	—	やや少	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(6月17日発表)によると、気温はほぼ平年並、平年に比べ曇りや雨の日が多い予想 (－)</p> <p>2) 県予察圃(6月上旬)では、寄生頭数は無防除区 18.9 頭/100 葉(平年 74.9 頭/100 葉)と少、慣行防除区 4.4 頭/100 葉(平年 21.8 頭/100 葉)と少 (－)</p> <p>3) 巡回調査圃場(6月第1～2週)では春葉寄生率 14.3%(平年 8.8%)と多、寄生頭数 0.21 頭/葉(平年 0.36 頭/葉)と少 (±)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は平年並 (±)</p> <p>考察:現状の発生量はやや少と考えられ、引き続き予想発生量はやや少と考えます。</p>
	チャノキイロアザミウマ	—	やや少	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(6月17日発表)によると、気温はほぼ平年並、平年に比べ曇りや雨の日が多い予想 (±)</p> <p>2) 県予察圃黄色粘着トラップ(6月上旬、無防除)では、誘殺数 1.2 頭/日(平年 2.8 頭/日)と少 (－)</p> <p>3) 県予察圃(6月上旬、無防除)では、寄生虫数 0 頭/100 果(平年 1.6 頭/100 果)と少 (－)</p> <p>4) 巡回調査圃場(6月第1～2週)では、被害果率 0%(平年 0.5%)と少 (－)</p> <p>5) 一般圃場では、発生量はやや少～平年並(概して平年並) (±)</p> <p>考察:現状の発生量はやや少と考えられ、引き続き予想発生量はやや少と考えます。</p>
ナシ	黒星病	—	やや多	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(6月17日発表)によると、気温はほぼ平年並、平年に比べ曇りや雨の日が多い予想 (+)</p> <p>2) 巡回調査圃場(6月第1～2週)では、発病葉率 0.3%(平年 1.9%)と少 (－)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量はやや多 (+)</p> <p>考察:一般圃場の発生状況を考慮して現状の発生量はやや多と考えられ、引き続き予想発生量はやや多と考えます。</p>
	ハダニ類	—	やや少	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(6月17日発表)によると、気温はほぼ平年並、平年に比べ曇りや雨の日が多い予想 (－)</p> <p>2) 巡回調査圃場(6月第1～2週)では、寄生葉率 0%(平年 0.06%)と少、寄生頭数 0 頭/葉(平年 0.0006 頭/葉)と少 (－)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量はやや少 (－)</p> <p>考察:一般圃場の発生状況を考慮して現状の発生量はやや少と考えられ、引き続き予想発生量はやや少と考えます。</p>

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
ブドウ	べと病	—	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(6月17日発表)によると、気温はほぼ平年並、平年に比べ曇りや雨の日が多い予想 (+)</p> <p>2) 巡回調査圃場(6月第1~2週)では、発病葉率0%(平年0%)と平年並に少 (±)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は少 (-)</p> <p>考察:現状の発生量は平年並に少と考えられ、引き続き予想発生量は平年並と考えます。</p>
果樹共通	カメムシ類	—	やや少	<p>要因</p> <p>1) 予察灯(御浜町6月上旬)では、誘殺数はツヤアオカメムシ16頭(平年68.1頭)と少、チャバネアオカメムシは8頭(平年647.3頭)と少 (-)</p> <p>2) 予察灯(畑・松阪市:6月第2半旬)では、誘殺数はツヤアオカメムシ4頭(平年49.2頭)と少、チャバネアオカメムシ7頭(平年96.2頭)と少 (-)</p> <p>3) フェロモントラップ(6月第2週)では、チャバネアオカメムシ誘殺数は、平坦地(松阪市嬉野川北町)で2.7頭(平年20.7頭)と少、中間地(津市白山町二本木)で156.0頭(平年272.7頭)と少、山地(津市白山町川口)で159.8頭(平年144.6頭)と平年並 (-)</p> <p>4) 巡回調査圃場(6月第2週、カンキツ圃場)では、叩き落としまたは見取り調査による飛来は0頭(平年0.07頭)と平年並の傾向 (±)</p> <p>5) 一般圃場では、発生量はやや少 (-)</p> <p>考察:一般圃場の状況を考慮して現状の発生量はやや少と考えられ、引き続き予想発生量はやや少と考えます。</p>
チャ	炭疽病	—	やや少	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(6月17日発表)によると、気温はほぼ平年並、平年に比べ曇りや雨の日が多い予想 (+)</p> <p>2) 巡回調査圃場(6月第2週)では、発生圃場率0%(平年8.9%)、発病葉数0枚/m<sup>2</sup>(平年0.2枚/m<sup>2</sup>)とともに少 (-)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は少 (-)</p> <p>考察:現状の発生量は少と考えられ、気象を考慮し予想発生量はやや少と考えます。</p>
	カンザワハダニ	—	やや少	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(6月17日発表)によると、気温はほぼ平年並、平年に比べ曇りや雨の日が多い予想 (±)</p> <p>2) 県予察圃(6月中旬)では、寄生頭数0.01頭/葉(平年0.04頭/葉)と少、寄生葉率1.0%(平年1.5%)とやや少 (-)</p> <p>3) 巡回調査圃場(6月第2週)では、発生圃場率50.0%(平年44.5%)とやや多、寄生葉率3.3%(平年4.4%)とやや少、寄生頭数0.05頭/葉(平年0.1頭/葉)と少 (-)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量はやや少 (-)</p> <p>考察:現状の発生量はやや少と考えられ、引き続き予想発生量はやや少と考えます。</p>

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
チャ	チャノホソガ	—	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(6月17日発表)によると、気温はほぼ平年並、平年に比べ曇りや雨の日が多い予想(±)</p> <p>2) 県予察圃フェロモントラップ(5月第4半旬～6月第3半旬)では、誘殺数9,686頭(平年2,620頭)と多(+)</p> <p>3) 巡回調査圃場(6月第2週)では、巻葉数0.11枚/m<sup>2</sup>(平年0.24枚/m<sup>2</sup>)と少(-)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は少(-)</p> <p>考察: 現状の発生量は、巡回調査圃場および一般圃場の結果からやや少と考えられ、県予察圃の状況から予想発生量は平年並と考えます。</p>
	チャノミドリヒメヨコバイ	—	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(6月17日発表)によると、気温はほぼ平年並、平年に比べ曇りや雨の日が多い予想(±)</p> <p>2) 県予察圃黄色粘着トラップ(5月第4半旬～6月第3半旬)では、捕殺数46.7頭(8年平均52.5頭)と平年並の傾向(±)</p> <p>3) 巡回調査圃場(6月第2週)では、叩き落とし虫数0.7頭(平年2.3頭)と少(-)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は平年並(±)</p> <p>考察: 県予察圃場と一般圃場の結果から現状の発生量は平年並と考えられ、予想発生量は平年並と考えます。</p>
	チャノキイロアザミウマ	—	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(6月17日発表)によると、気温はほぼ平年並、平年に比べ曇りや雨の日が多い予想(±)</p> <p>2) 県予察圃黄色粘着トラップ(5月第4半旬～6月第3半旬)では、捕殺数544頭(8年平均787頭)と平年並の傾向(±)</p> <p>3) 巡回調査圃場(6月第2週)では、叩き落とし虫数0頭(平年8.8頭)と少(-)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は平年並(±)</p> <p>考察: 一般圃場を重視し現状の発生量は平年並と考えられ、引き続き予想発生量は平年並と考えます。</p>
	クワシロカイガラムシ	平年並	やや多	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(6月17日発表)によると、気温はほぼ平年並、平年に比べ曇りや雨の日が多い予想(±)</p> <p>2) 有効積算温度による予測式では、第2世代幼虫孵化最盛日は7月20日頃(平年7月21日頃)(発生時期±)</p> <p>3) 巡回調査圃場(6月第2週)では、雌寄生株率15.1%(平年7.5%)と多、雄繭発生株率25.0%(平年8.6%)と多(+)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は平年並(±)</p> <p>考察: 現状の発生量はやや多と考えられ、引き続き予想発生量はやや多と考えます。予想発生時期は平年並と考えます。</p>

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
チャ	チャノコカクモンハマキ	—	やや多	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(6月17日発表)によると、気温はほぼ平年並、平年に比べ曇りや雨の日が多い予想(±)</p> <p>2) 県予察圃フェロモントラップ(5月第4半旬～6月第3半旬)では、誘殺数654頭(平年170頭)と多(+)</p> <p>3) 巡回調査圃場(6月第2週)では、ハマキムシ類巻葉数3.61枚/m<sup>2</sup>(平年1.09枚/m<sup>2</sup>)と多(+)</p> <p>4) 一般圃場では、ハマキムシ類の発生量はやや少(-)</p> <p>考察: 県予察圃と巡回調査圃場の結果を重視し現状の発生量は平年並と考えられ、県予察圃の状況から予想発生量はやや多と考えます。</p>
イチゴ	うどんこ病	—	少	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(6月17日発表)によると、気温はほぼ平年並、平年に比べ曇りや雨の日が多い予想(-)</p> <p>2) 巡回調査圃場(6月第2週)では、発病株率0.0%(平年4.1%)と少(-)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は少(-)</p> <p>考察: 現状の発生量は少と考えられ、今後の気象条件から引き続き予想発生量は少と考えます。</p>
	炭疽病	—	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(6月17日発表)によると、気温はほぼ平年並、平年に比べ曇りや雨の日が多い予想(+)</p> <p>2) 巡回調査圃場(6月第2週)では、発病株率0%(平年0%)と平年並に少(±)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は少(-)</p> <p>考察: 現状の発生量は、平年並に少と考えられ、今後の気象条件から予想発生量は平年並と考えます。</p>
	ハダニ類	—	やや少	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(6月17日発表)によると、気温はほぼ平年並、平年に比べ曇りや雨の日が多い予想(±)</p> <p>2) 巡回調査圃場(6月第2週)では、寄生株率0.5%(平年6.8%)と少(-)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は少～平年並(概してやや少)(-)</p> <p>考察: 一般ほ場の状況から現状の発生量はやや少と考えられ、引き続き予想発生量はやや少と考えます。</p>
ネギ	ネギコガ	—	やや少	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(6月17日発表)によると、気温はほぼ平年並、平年に比べ曇りや雨の日が多い予想(+)</p> <p>2) 巡回調査圃場(6月第2週)では、被害葉率0%(平年0.05%)とやや少(-)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は無～平年並(概して少)(-)</p> <p>考察: 巡回調査の状況から現状の発生量はやや少と考えられ、引き続き予想発生量はやや少と考えます。</p>

## 4. 予察項目の見方

### 1) 「作物別の状況」の見方

**発生時期(平年比)：** 平年の発生日日からの差を「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の5段階評価で予測します。ただし、発生時期が毎年大きく変化する病害虫では、日数の基準が下記より大きくなります。発生時期を予察する意義の小さい病害虫では予察しません。

日数		-6	-5	-4	-3	-2	-1	平年発生日	1	2	3	4	5	6	
評価		早	やや早		平年並				やや遅			遅			

**発生量(平年比)：** 発生密度の平年値からの差を「少、やや少、平年並、やや多、多」の5段階評価で予測します。平年値との比較なので、平年値が小さければ、「多」になっても見かけの密度は多くないことがあります。毎年多発生している場合は「平年並」や「やや少」でも見かけ上は多いと感じることがあります。

			平年値 ↓			
度数	10%	20%	20%	20%	20%	10%
評価	少	やや少	平年並	やや多	多	

**発生量(程度)：** 発生程度を「小、中、大、甚」の4段階評価で予測します。評価の基準値は病害虫毎に異なりますが、大雑把には、「見た目の多さ・少なさ」です。甚になるほど見た目は多くなり、小になるほど見た目は少なくなります。「発生量(平年比)」と比

べることによって、「平年並に発生程度が小さい」「発生程度は大きい」「平年並の発生量である」「平年より多いが、発生程度は小さい」「平年よりやや少ないが、依然として発生程度は中くらいである」等のように判断してください。

小	中	大	甚
---	---	---	---

**要防除圃場率(平年比)：** 防除の必要性の目安を「低、普通、高」の3段階評価で予測します。「普通」であれば、県下の大半の圃場では防除暦に沿った通常の防除が必要と予想されます。「高」であれば、防除時期の見直しや追加防除などが必要になると予想されます。「低」であれば、防除回数を減らせるか、防除しなくても済むと予想されます。

低	普通	高
---	----	---

**発生消長の一例：** 発生予報は向こう1か月の予報ですが、その前後を合わせて40日ほどの病害虫の発生消長の一例をグラフで示します。大まかな目安として利用してください。

**防除の注意事項：** 向こう1か月の病害虫の特性と防除に関する説明です。

### 2) 「発生時期・発生量(平年日)の予察根拠」の見方

(±)：平年並の要因

(+)：発生量増加または発生時期遅延の要因

(-)：発生量減少または発生時期早期化の要因

## 5. 気象のデータ

### 東海地方 1 か月予報 (令和 3 年 6 月 17 日 名古屋地方気象台発表)

期間のはじめを中心に、前線や湿った空気の影響を受けやすい時期があるため、平年に比べ曇りや雨の日が多いでしょう。平均気温はほぼ平年並み、降水量は平年並か多く、日照時間は平年並か少ないでしょう。

1 週目 6 月 19 日～ 25 日	前線や湿った空気の影響を受けやすく、平年に比べ曇りや雨の日が多いでしょう。
2 週 6 月 26 日～ 7 月 2 日	平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。
3～4 週目 7 月 3～16 日	平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。

### 東海地方週間天気予報

(令和 3 年 6 月 20 日 16 時 37 分 名古屋地方気象台発表)

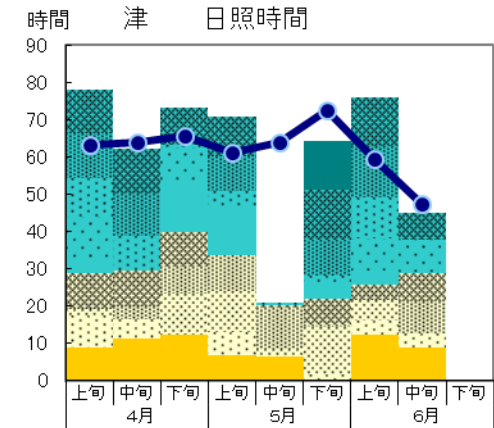
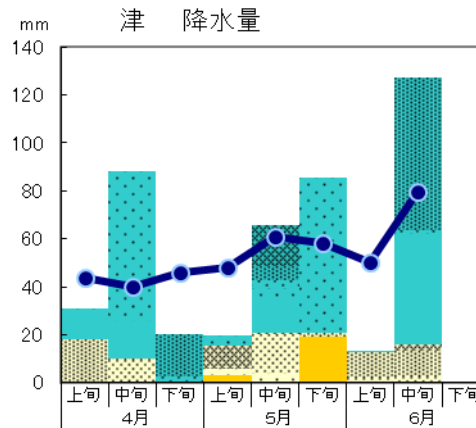
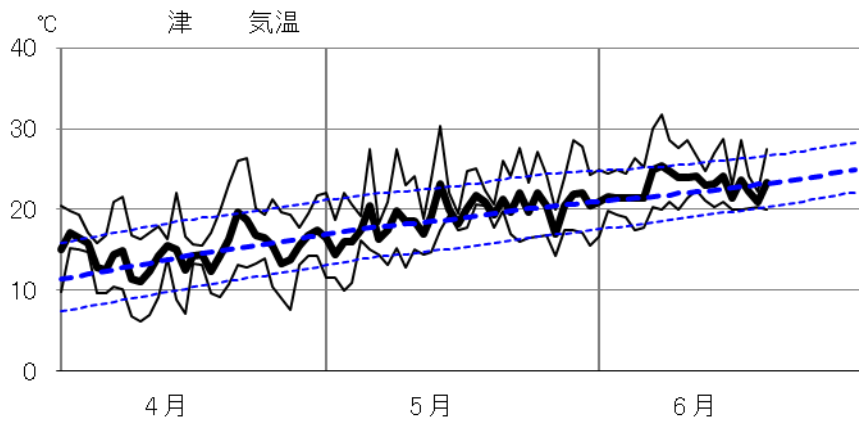
予報期間 6 月 21 日～6 月 27 日まで

向こう一週間は、期間のはじめは高気圧に覆われて晴れる日もありますが、その後は前線や湿った空気の影響で曇りや雨の日が多いでしょう。

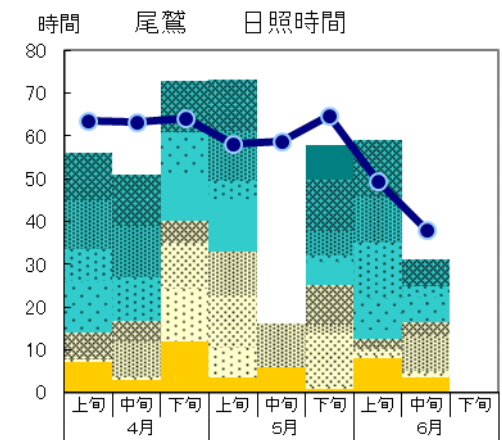
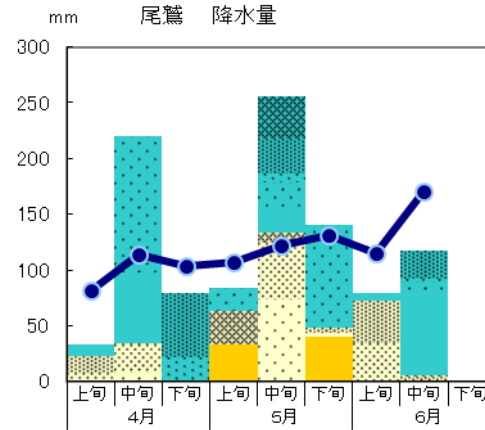
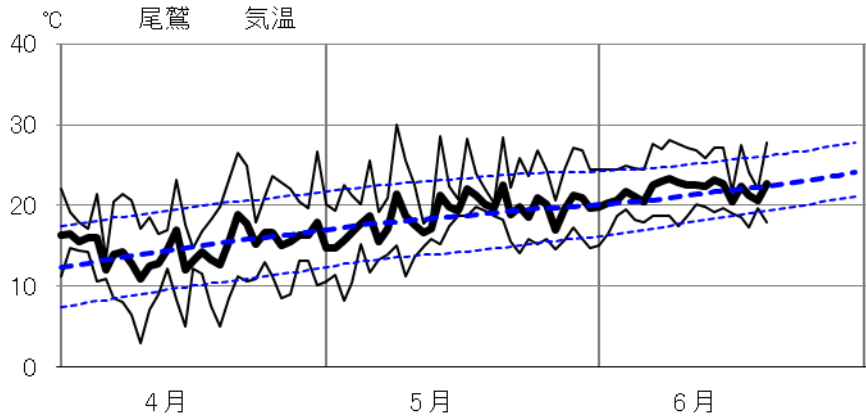
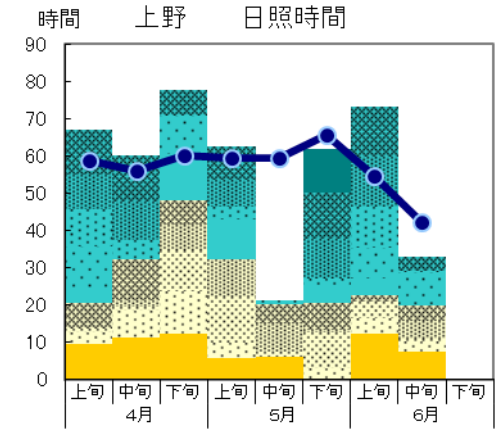
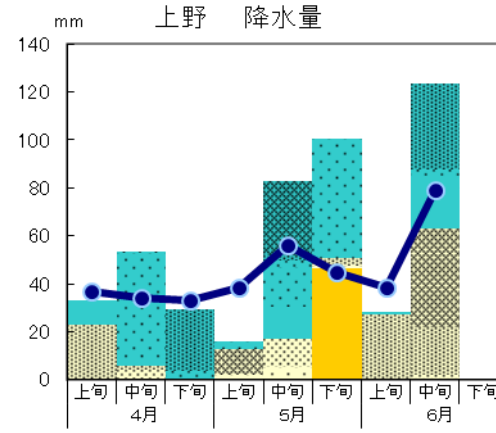
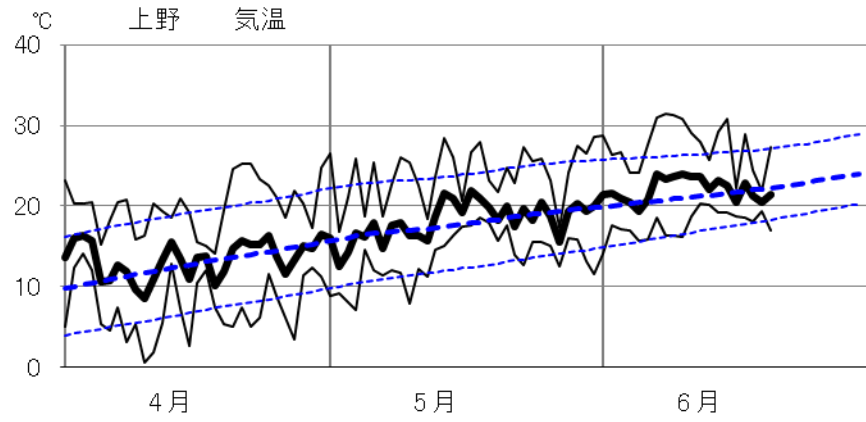
最高気温と最低気温はともに、平年並か平年より低い日が多いですが、期間のはじめは平年より高い所もある見込みです。

降水量は、平年並みか平年より多いでしょう。

### 気象の日別推移 (気象庁発表データ <http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/index.php> から作成) (6 月 20 日まで)







- 凡例
- 平均
  - 最高
  - 最低
  - - - 平年平均
  - - - 平年最高
  - - - 平年最低

- 凡例
- 31日
  - 旬10日目
  - 旬9日目
  - 旬8日目
  - 旬7日目
  - 旬6日目
  - 旬5日目
  - 旬4日目
  - 旬3日目
  - 旬2日目
  - 旬1日目
  - 旬平年値

- 凡例
- 31日
  - 旬10日目
  - 旬9日目
  - 旬8日目
  - 旬7日目
  - 旬6日目
  - 旬5日目
  - 旬4日目
  - 旬3日目
  - 旬2日目
  - 旬1日目
  - 旬平年値

## 6. おしらせ (前回と異なる項目には **NEW** の印があります)

### 1) 記載基準の注意点

平年ほとんど発生のないか非常に少ない病害虫については、平年並に少ない発生状態の「発生量平年比」を「平年並」、「発生量程度」を「小」と記述しています。

### 2) 発表日 **NEW**

本年度の病害虫発生予報は次の予定で発表します。

- |                  |                  |
|------------------|------------------|
| 第1回 4月22日(木)(済み) | 第2回 5月20日(木)(済み) |
| 第3回 6月24日(木)(今回) | 第4回 7月20日(火)     |
| 第5回 8月26日(木)     | 第6回 10月21日(木)    |
| 第7回 3月24日(木)     |                  |

### 3) 利用方法

全部または一部をコピーして回覧・配布にご利用ください。ただし必ずページの右下にある「三重県病害虫防除所」の文字が入るようにしてください。

病害虫防除所ホームページには、この予報をはじめとして、不定期に発表される警報、注意報、特殊報、技術情報や、各種のグラフ、写真も載っています。下記のアドレスからお入りください。

<http://www.pref.mie.lg.jp/byogai/hp/index.htm>

このホームページはフリーリンクです。リンクする場合、事前の承諾申請等は不要ですが、事後で結構ですのでメールにてご一報いただくと幸いです。

### 4) 本冊子の利用の手引き書

本冊子の見方を説明した「病害虫発生予報利用の手引き」があります。下記のアドレスからお入りください。

<http://www.pref.mie.lg.jp/common/content/000835764.pdf>

### 5) メール配信サービス

予報、警報、注意報、特殊報、技術情報が発表されたときに、ホームページに掲載されたという「掲載通知」を電子メールでお知らせしています。このメールの配信を希望される方は、下記のアドレスからお申し込みください。

<http://www.pref.mie.lg.jp/byogai/hp/39475007379.htm>

### 6) 農薬登録状況の最新情報

農薬の販売や使用に当たっては、農薬登録上の制限があります。農薬の使用時はラベルをよく読んでください。次のインターネットサイトでは、最新の農薬登録状況が確認できます。

三重県農薬情報システム

<https://www.nouyaku-sys.com/nouyaku/user/top/mie>

独立行政法人農林水産消費安全技術センターの「農薬登録情報提供システム」

[http://www.acis.famic.go.jp/index\\_kensaku.htm](http://www.acis.famic.go.jp/index_kensaku.htm)

### 7) IPM(総合的病害虫・雑草管理)実践指標について

三重県では IPM を実践する上で必要な農作業の具体的な取組内容を示した作物別の指標を公表しています。農業者の皆さんの取組について、現状把握と今後の気づきにご活用ください。病害虫防除所ホームページにリンクを設定しています。

三重県農林水産部農産園芸課ホームページ内

<http://www.pref.mie.lg.jp/NOAN/HP/80301022763.htm>